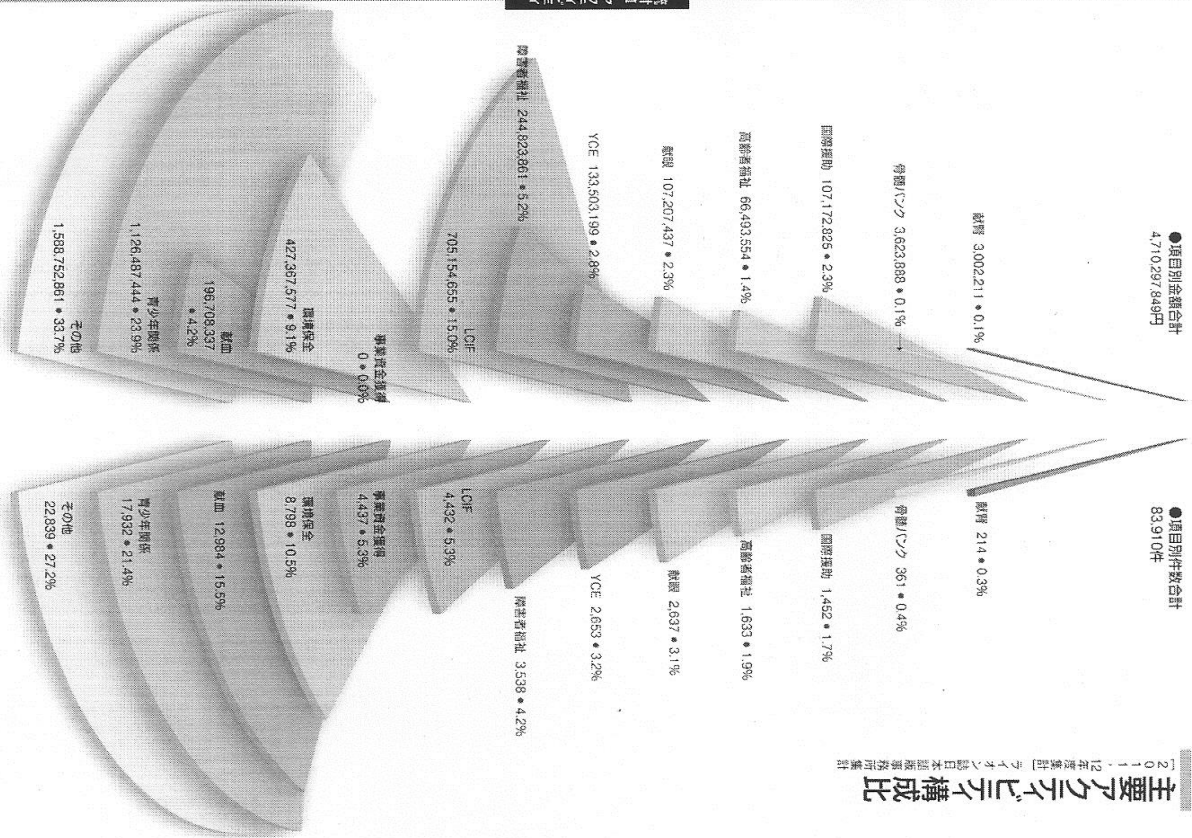


■ライオンズクラブ統計

●項目別金額合計
4,710,297,849円

●項目別件数合計
83,910件

主要アソシエイト構成比
2011・12年度重要項目ライオンズ献血推進事務局集計



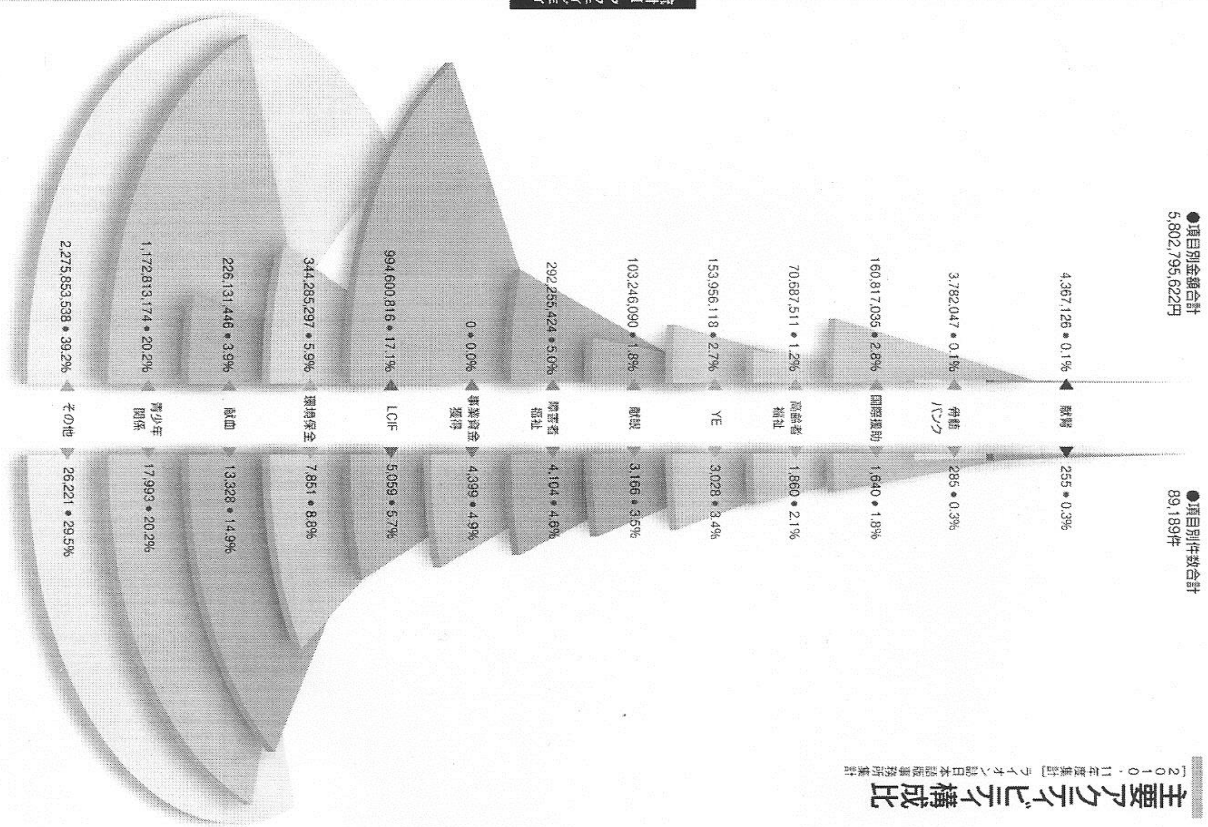
13 LION 2012年10月号

■ライオンズクラブ統計

●項目別金額合計
5,802,795,622円

●項目別件数合計
89,139件

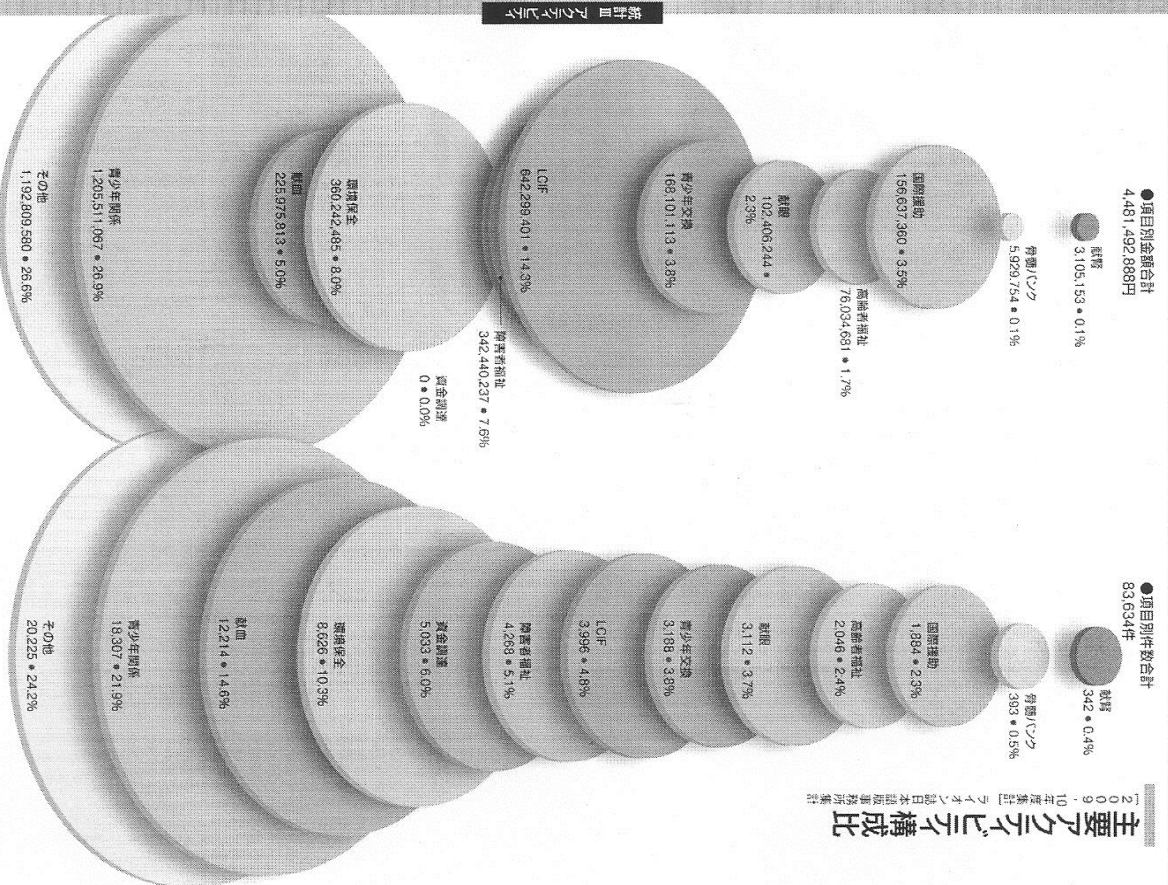
主要アソシエイト構成比
2010・11年度重要項目ライオンズ献血推進事務局集計



11 LION 2011年12月号

主要アライアンス構成比

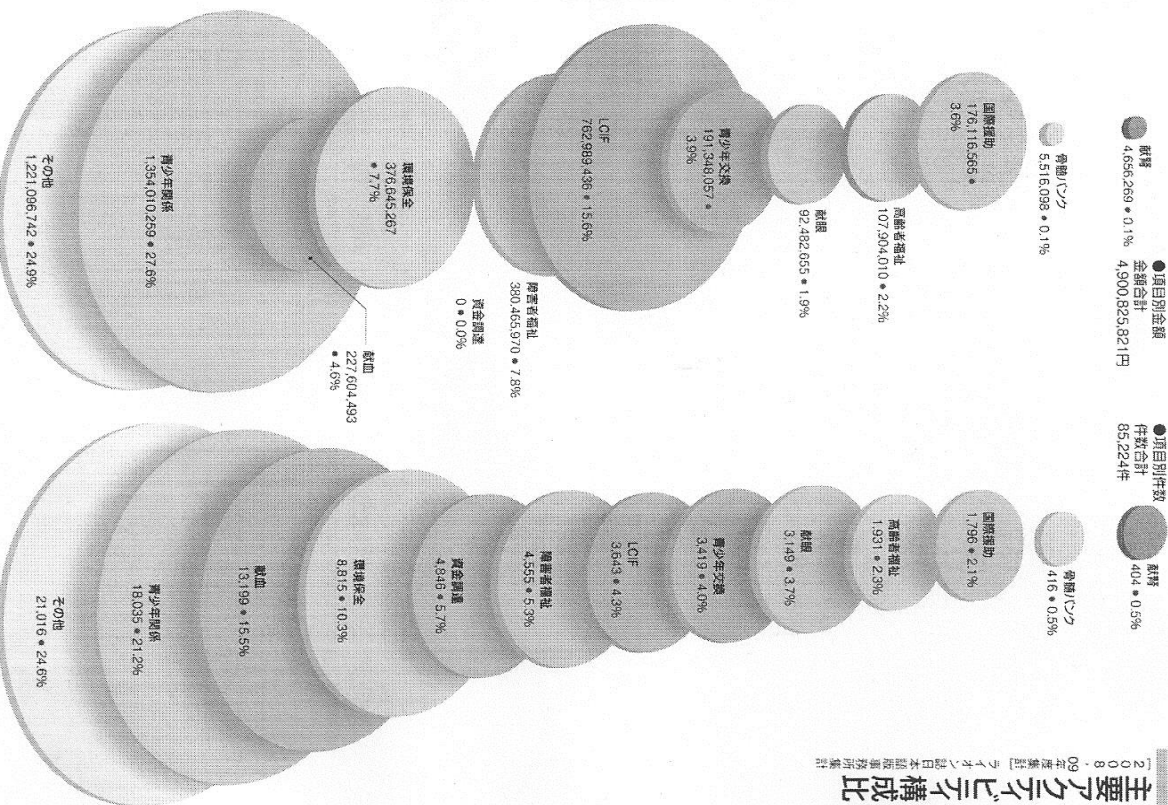
（2009：10年度集計）ライオンズクラブ国際協会が集計



11 LION 2010年12月号

主要アライアンス構成比

（2008：02年度集計）ライオンズクラブ国際協会が集計

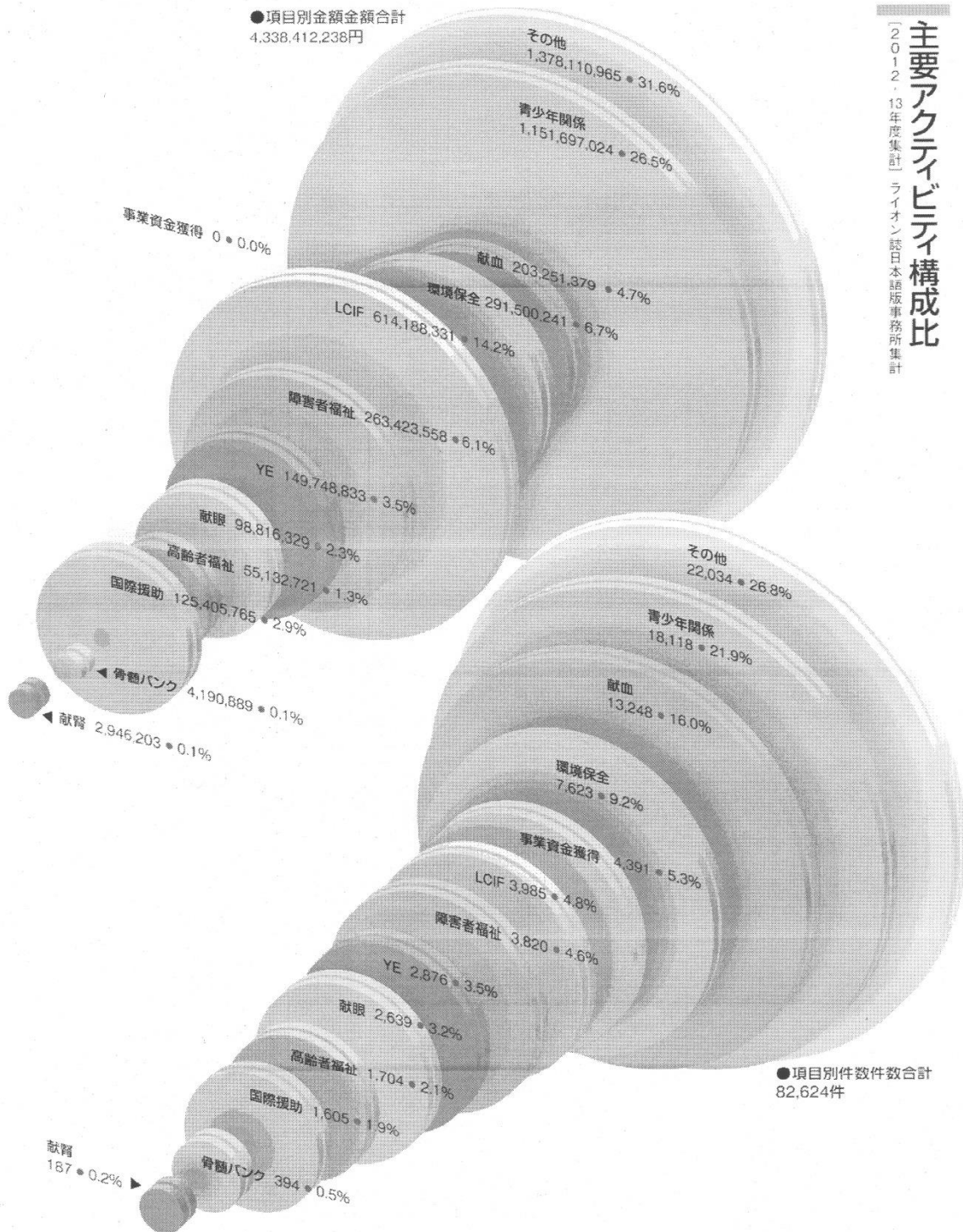


11 The Lion 2009.12/13

特集：ライオンズクラブ統計

主要アクティビティ構成比
(2012・13年度集計) ライオン誌日本語版事務所集計

統計Ⅲ アクティビティ



ライオンズクラブ国際協会 献血資料

献血アクティビティの 2008 年度～2012 年度推移表 7 月～翌年 6 月＝年度

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
アクティビティ件数	13,199	12,214	13,328	12,984	13,248
年度内構成比	15.5%	14.6%	14.9%	15.5%	16.0%
献血使用事業資金	227,604,493	225,975,813	226,131,446	196,708,337	203,251,370
総事業費内構成比	4.6%	5.0%	3.9%	4.2%	4.7%
献血数量（類推） 件数×90%×25 人 ×0.4（400 cc）＝〇	118,791 〇	109,926 〇	119,952 〇	116,856 〇	119,232 〇
クラブ数	3,337	3,288	3,257	3,225	3,194
メンバー数	108,779 人	105,582 人	103,591 人	101,781 人	100,768 人

上記データはライオン誌日本語版より転載した公式データです。

但し、献血数量は、類推となっております。（下記の通りシビアな判断をしております。）
 献血アクティビティ件数の内 10%を献血を伴わない推進キャンペーンとしておりますが、献血を伴わないアクティビティは実質 5%以下で、95%以上が献血を行うアクティビティと推測できます。
 1 回の採血人数を 25 人とみなしておりますが非常に少ないみなし数です。（自クラブでは概ね 40 人前後です。）

事業資金に関して：売血と見なされる事を日本赤十字社が避ける指導を厳しくされている為に、ライオンズクラブとしても、献血者に対しての対価支払いに成らない様に、菓子等提供等に抑えておりますので、件数構成比に比べ事業費構成比が少なくなっております。

ライオンズクラブ全メンバーに配送される機関紙に「献血」に関する特集記事が掲載されたライオン誌日本語版 2013 年月号で、ライオンズクラブの奉仕活動に於いて、献血活動が重要な地位を占めているので、全メンバーに正確な情報を再確認させ、活動の活発化を目指した記事。

THEME

大人の社会科見学 献血編

今日も全国のどこかで、ライオンズが
献血への協力を呼び掛けている。命をつなぐ
ために輸血や血液製剤が欠かせない人を
助ける献血。提供された血液はどのように
必要な人の元へ届けられているのか。

日本赤十字社の血液事業の
現場を見学
する。

献血活動で得られた血液の行方

血液製剤が出来るまで

日本ライオンズの主要アクティビティの一つとなっている献血事業。しかし、採血された血液がその後、どのようにして血液製剤となって人々の役に立っているのか、ご存じない方も多いだろう。そこで今回、日本赤十字社にお願いし、その過程を見学させて頂いた。最新の献血ルーム事情と共に紹介する。

文／砂山幹博 写真／田中勝明

方々から血液が集まる ブロック血液センター

見学したのは東京都江東区辰巳にある日本赤十字社（日赤）の関東甲信越ブロック血液センター。移動採血車や常設の献血ルームで採血された血液はここに集められ、血液製剤に調製される。日赤ではこれまで各都道府県に設置している地域血液センター単位で、採血や血液製剤の調製、医療機関への供給を行ってきたが、平成24年4月からその体制を変更した。現在は全国を七つのブロックに分け、輸血用血液製剤の検査・製造業務に関してはブロックごとに集約し、効率化を図っている。

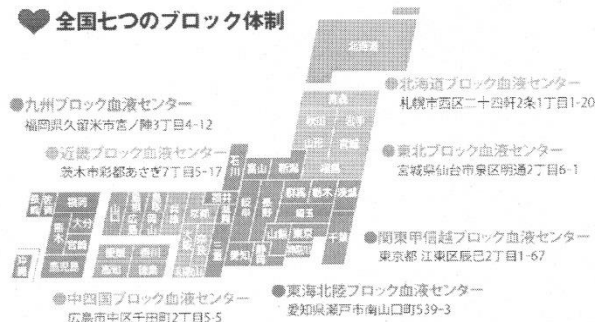
今回お邪魔した関東甲信越ブロック血液センターでは、ブロック内の1都9県（茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、山梨県、長野県）の血液が年間約190万人分が集まる。これは全国の約36%を占める数字だ。

さすがに東京・辰巳だけで担うには量が多過ぎるということもあり、血液製剤の製造所が、埼玉県と神奈川県にそれぞれ設けられている。

採血された場所により、血液が辰巳に届けられるまでの搬送方法はまちまちだ。辰巳に近い有楽町の献血ルームからは1日に5回、直接血液が運ばれてくるが、遠方からだとそ

うはいかない。最も遠い山梨県には常設の献血ルームが一つしかない。これを単独で東京に運んでいては効率が悪いので、一度県の血液センターに集積し、移動採血車などで集められた血液と共に東京へやって来る。また、千葉県には千葉市内に血液センターがあるが、東京に隣接する県内各都市の場合、千葉市の血液センターに届けるより直接東京のブロック血液センターに届けた方が早いという理由で、献血ルームから直接血液が届けられている。こうして辰巳には毎日、さまざまな場所からひっきりなしに血液が運び込まれている。

全国七つのブロック体制



大人の社会科見学・献血編

血液センターに運ばれて来た全血献血のバッグは、副作用予防のため、白血球が除去される



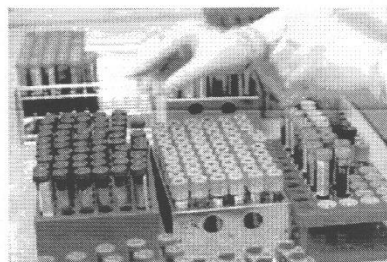
7 LION 2013年9月号

THEME

● 献血された血液が
血液製剤になるまで

ブロック血液センターに運ばれてきた血液は到着後すぐに、血液型や各種ウイルスの抗原・抗体の有無などを調べる検査部門へ行くものと、血液製剤を作る製剤部門へ行くものとに分けられる。検査とは、製品として医療機関へ出せるかどうかを判断するプロセスのこと。意外だったのは、検査をパスしたもののだけを製剤にするのではなく、検査と調製が同時に行われるという点。血液製剤には有効期間が設けられていることもあって、早く製品化しなければならぬ。そのため、製品の状態になるまで調製を進めておき、最後に検査結果と照らし合わせるのだ。検査結果が出るのは血液が到着した翌日か翌々日。照合の結果、検査を通ったものだけが次の供給部門へと運ばれていく。極端な話、照合前の血液製剤にはB型肝炎やHIVに感染しているものも含まれているかもしれない。だからこそ、検査は厳重に行われている。

検査で使われるのは、一人の献血につき試験管が5本分。この血液は、採血時に献血分とは別に採取されるもので、5色のキャップで色分けされている。5色の試験管に同じバー



献血時には検査用の血液も採取する。検体は一人の献血につき5本。それぞれ色分けされており、血液型や感染症などの検査に使用される

コードが貼られ、オートメーション化された検査機器に通されるため、血液の持ち主を取り違えるようなヒューマンエラーは起き得ない。

色分けされた試験管はそれぞれ、ABOやRhといった血液型を調べ「血液型検査」用、「血球計数検査」

「検査」用、肝炎ウイルスやHIVウイルスなどを調べる「生化学・感染症検査」用、「核酸増幅検査」用、「保管管」用の5種類。聞き慣れない核酸増幅検査とは、ウイルスの遺伝子を10万倍以上に増幅して行う検査方法のことで、極めて感度の高い検査結果を得ることが出来る。核酸増幅検査が出来るのは、全国で4カ所（北海道、東京都、京都府、福岡県）のみ。辰巳では、沖縄県と東北6県の間も合わせ年間226万本を検査している。保管用は主に遡及調査のためのもので、11年間保管される。例えば、B型肝炎に感染していることが分かった時に、5年前に保存している血液と比較するといった用途などに使用される。ちなみに検査で不合格になるのは、およそ2〜3%。

● 輸血用の血液製剤は
用途別採血が主流

製剤部門へ渡った献血の血液は、血液製剤に調製されるが、その前に血液製剤について簡単に説明しておこう。医療の分野で「血液製剤」と呼ばれているものは、人の血液から作り出される医薬品の総称。「輸血

感染症にかかっているもの以外では、飲み過ぎが原因で肝機能の指標となるALT値が高いものなどが半数以上含まれる。宴会が多い時期や、年明け早々の献血ではこのような検査結果が出る件数が普段より多くなるのだそうだ。検査に落ちた血液にもニーズがある。研究用途や試薬の品質向上のために医療機関や大学の研究室へ譲渡され有効活用されている。



THEME

用血漿製剤」と「血漿分画製剤」の2種類があり、前者には「赤血球製剤」「血漿製剤」「血小板製剤」「全血製剤」の四つがある。

赤血球製剤は、血液から血漿、白血球及び血小板の大部分を取り除いたもの。主に外科手術などによる出血時に使用される。採血後21日間使用することが出来る。

血液から出血の防止に必要な各種の凝固因子が含まれる血漿を取り出したものが血漿製剤だ。凝固因子の欠乏によって出血しやすくなった患者に使用される。品質を保持するために採後後マイナス20度以下で凍結保存され、採血後1年間使用することが出来る。

血小板製剤は、成分採血装置を用いて血液の止血機能を持つ血小板を採取したもの。何らかの理由で血液中の血小板が減少する他、血小板の異常によって止血が十分なために出血している場合や、出血の危険性が高い場合に使用される。使用可能な期間は短く、採血後4日間だ。

全血製剤は採血後の血液に抗凝固剤を加えて作られたもので、赤血球と血漿の同時補給を要するような大

量輸血時に使用される。しかし赤血球製剤の使用が主流となった現在では、ほとんど使われることはない。赤血球製剤と同様、採血後21日間使用が可能だ。

ライオンズが携わる献血活動の多くは、移動採血車を利用することが多いはず。採血車での採血といえは400ミリットルと200ミリットルの全血献血で、これがブロック血液センターに運ばれて赤血球製剤と血漿製剤に分離される。

献血の種類にはもう一つ、成分献血がある。成分採血装置を使って血液中の血漿と血小板を分離してバッグに採取し、赤血球と白血球を一部の血漿と共に体内へ戻す献血方法で、身体への負担が少ない上、より多くの血漿や血小板を提供してもらえる特長がある。装置の関係で、移動採血車では成分献血が行えないため、献血ルームでの採血が必要になる。

● 献血された血液が
血液製剤になるまで

さて、輸血用の血液製剤はどのようにして作られるのかを確かめに、

製造現場へ足を踏み入れた。ここでは全血血液（400ミリットル及び200ミリットル）が血液製剤になる過程を追ってみる。

採血された血液は、温度管理された輸送容器で血液センターに搬入されてくる。そのため最初に適正な温度で運搬されたかを確認し、目視で異物が含まれていないかをチェックする。血液の採血（製造）番号、重量などをコンピュータに入力した後、いよいよ白血球の除去作業となる。この作業は、白血球が原因で起こる輸血副作用を予防するために行うものだ。副作用とは、輸血した血液の細胞が患者の体内で生着・増殖し、その細胞が患者の細胞を「異物」として攻撃するというもの。死亡率も高い。そのような恐ろしさを持つ割に、操作は拍子抜けするほど単純な装置を使って行われていた。吊り下げられた献血バッグからは管が下がり、重力落差を利用して管から白血球除去フィルターに血液を流し込んでいく。フィルターは繊維を編み込んだ膜状になっており、血液が膜を通ると、ろ過されて白血球だけが取り除かれるという仕組みだ。重力



約4度の保管庫で出荷を待つ赤血球製剤

任せなので、血液の粘度によって血液が管を落ちていくスピードが異なっていたのが印象的だった。それにしても、ほとんど全てオートメーション化されていた検査の行程とは打って変わって、こちらはそれぞれの作業に人の手が必要とされるセクションだ。全てを機械化するのはまだ難しいという。白血球除去の次は、血液バッグを巨大な脱水機のような遠心機にかけ、血液を

THEME

用血漿製剤」と「血漿分画製剤」の2種類があり、前者には「赤血球製剤」「血漿製剤」「血小板製剤」「全血製剤」の4つがある。

赤血球製剤は、血液から血漿、白血球及び血小板の大部分を取り除いたもの。主に外科手術などによる出血時に使用される。採血後21日間使用することが出来る。

血液から出血の防止に必要な各種の凝固因子が含まれる血漿を取り出したものが血漿製剤だ。凝固因子の欠乏によって出血しやすくなった患者に使用される。品質を保持するために採取後マイナス20度以下で凍結保存され、採血後1年間使用することが出来る。

血小板製剤は、成分採血装置を用いて血液の止血機能を持つ血小板を採取したもの。何らかの理由で血液中の血小板が減少する他、血小板の異常によって止血が不十分なために出血している場合や、出血の危険性が高い場合に使用される。使用可能な期間は短く、採血後4日間だ。

全血製剤は採血後の血液に抗凝固剤を加えて作られたもので、赤血球と血漿の同時補給を要するような大

量輸血時に使用される。しかし赤血球製剤の使用が主流となった現在では、ほとんど使われることはない。赤血球製剤と同様、採血後21日間使用が可能だ。

ライオンズが携わる献血活動の多くは、移動採血車を利用することが多いはず。採血車での採血といえは400ミリットルと200ミリットルの全血献血で、これがブロック血液センターに運ばれて赤血球製剤と血漿製剤に分離される。

献血の種類にはもう一つ、成分献血がある。成分採血装置を使って血液中の血漿と血小板を分離してバッグに採取し、赤血球と白血球を一部の血漿と共に体内へ戻す献血方法で、身体への負担が少ない上、より多くの血漿や血小板を提供してもらえる特長がある。装置の関係で、移動採血車では成分献血が行えないため、献血ルームでの採血が必要になる。

● 献血された血液が
血液製剤になるまで

さて、輸血用の血液製剤はどのようにして作られるのかを確かめに、

製造現場へ足を踏み入れた。ここでは全血血液（400ミリットル及び200ミリットル）が血液製剤になる過程を追ってみる。

採血された血液は、温度管理された輸送容器で血液センターに搬入されてくる。そのため最初に適正な温度で運搬されたかを確認し、目視で異物が含まれていないかをチェックする。血液の採血（製造）番号、重量などをコンピュータに入力した後、いよいよ白血球の除去作業となる。この作業は、白血球が原因で起こる輸血副作用を予防するために行うものだ。副作用とは、輸血した血液の細胞が患者の体内で生着・増殖し、その細胞が患者の細胞を「異物」として攻撃するというもの。死亡率も高い。そのような恐ろしさを持つ割に、操作は拍子抜けするほど単純な装置を使って行われていた。吊り下げられた献血バッグからは管が下がり、重力落差を利用して管から白血球除去フィルターに血液を流し込んでいく。フィルターは繊維を編み込んだ膜状になっており、血液が膜を通ると、ろ過されて白血球だけが取り除かれるという仕組みだ。重力



約4度の保管庫で出荷を待つ赤血球製剤

任せなので、血液の粘度によって血液が管を落ちていくスピードが異なっていたのが印象的だった。

それにしても、ほとんど全てオートメーション化されていた検査の行程とは打って変わって、こちらはそれぞれの作業に人の手が必要とされるセクションだ。全てを機械化するのにはまだまだ難しいという。白血球除去の次は、血液バッグを巨大な脱水機のような遠心機にかけ、血液を

大人の社会科見学・献血編



最先端のファッションカルチャーを発信する学校法人文化学園とのコラボレーション
が実現した献血ルーム「新宿ギフト」。学生らの作品が多数展示されている

赤血球成分と血漿成分に分離させる。毎分約4千回転で10～15分間回転させると、各成分の比重値の差によりバッグの中ははっきり2層に分かれていた。下の赤い部分が主に赤血球で、上の黄色い液体が血漿だ。上下2層となった血液バッグを今度は成分分離装置にセット。あつという間に赤血球製剤のバッグと血漿製剤のバッグが出来上がった。この時、赤血球製剤のバッグには、単独では生きられない赤血球のために赤血球のご飯である「MAP液」が一緒に入れられる。体内では赤血球はおよそ120日間生きると言うが、この調整により体外でも21日間（3週間）の有効期間内は品質が保たれる。こうして分離調製された赤血球製剤の一部には、製剤に残存する白血球による副作用を防ぐため放射線の照射が行われる。

分離された血液製剤は、この後検査結果と照合され、合格したものが晴れて輸血用血液製剤として出回ることになる。赤血球製剤は約4度に保たれ出荷を待つが、血漿製剤はその日のうちにマイナス70度で急速冷凍され、1晩寝かせた後にマイナス30度で保存される。一部はそのままの状態でも解凍して使用され、一部は血漿分画製剤の原料となる。血漿分



県内7番目の施設として2013年4月6日にオープンした献血ルーム「にしきた」はカフェのような雰囲気の内装が特徴。近隣の学生が立ち寄りやすい空間が意識されている



画製剤とは、多人数から得た血漿成分をプールし、ある程度たまってから治療に有益なタンパク質を取り出し、高純度に精製したもの。使用目的に応じて製薬メーカーなどで、いくつかの種類のタンパク質製剤に精製され、粉末状や液状に加工される。

冷凍赤血球の保管庫を見せてもらった際に面白い話を聞いた。数の少ないことで知られるRh型の血液だが、実は100人に0・5～1人程度の割合で存在するため、希少な血液型の中では比較的多い方なのだという。世の中には10万人に一人であるとか、日本国内を探してもその人一人しかいないという血液を持つ人がいる。そうしたレアな血液が、ここには10年間の期間を設けて冷凍保管されている。こうした血液の安定供給機能もこのブロック血液センターの大きな役目なのである。

●特徴ある献血ルームが 続々とオープン

献血の最前線、常設の献血ルームに新しい波が訪れている。既存の施設とは一線を画す新しいコンセプトの下に作られた特徴のある献血ルームが各地でオープンしているのだ。いずれも来所が見込まれるターゲット層や立地環境などを考慮した、お

しゃれで開放的な献血ルームとなっている。

東京新宿エリア四つ目の献血ルームとして、2012年9月にオープンした「新宿ギフト」は、すぐそばにある学校法人文化学園とコラボレーションした内装が特徴的だ。エレベーターホールの巨大なショーウィンドウには、有名スタイリストやファッションデザイナーを輩出している同校生徒の作品がマネキンに着せられ並んでいる。一見して、献血ルームとは分らない。このことを知らずに訪れた献血希望者はエレベーターを降りると決まって「降りる階を間違えた」と慌てるのだとか。他にも、壁に飾られているインテリアの多くが学生の手によるもの。3カ月に1回のペースで作品の入れ替えを行うため、その前後では、まるで違う印象になるという。

「80年代から見た未来」がデザインコンセプトという東京秋葉原の「akiba・F」は、F(=Futureの頭文字)の名の通り、全体的にSFっぽさを感じる献血ルームだ(14ページ写真)。入り口正面には休憩室が広がっており、総合受付で献血の手續きを済ませた後、または献血が終わった後にこの休憩室でゆっくり休めるようになっている。本棚には雑

大人の社会科見学・献血編

誌や漫画がある他、Wi-Fi接続や電源設備が完備されているので持ち込み機器でのネット閲覧も可能だ。また、秋葉原という場所柄もあり、所々にアニメの要素が見られるのも面白い。

● リピーターを増やし 献血活動が続いていくために

関西にも新しい波は届いている。兵庫県内7番目の施設として2013年4月6日にオープンした「にした」献血ルームは阪急西宮北口駅前の商業施設ビル内にある。こちらは2001、08年の間、毎週土日月曜の3日間に限り献血ルームではなく「献血会場」という形で同じ建物に臨時開設していた経緯がある。県内でも過疎化が進む都市が多い中、西宮は人口が増えている。しかも阪急西宮北口駅は二つの路線が交わるターミナル駅ということもあり人の流れも多い。近隣には大型のショッピングセンターがあるだけでなく大学も多く、駅周辺は幅広い年齢層の人々が行き交い活気がある。一時閉鎖となつてしまった献血会場時代にここで呼び掛けをしていた地元ライオンズクラブを含め、常設の献血ルームを開設してほしいという声は根強くあった。

にきた献血ルームを目指して来た人でも、その場にたどり着くと、新宿ギフトと同様戸惑うことが多いという。それもそのはず、見た目がまるでカフェなのだ。中をのぞくと飲み物を片手に雑誌を読んでいる人ばかり。学生がここで勉強が出来るようにと、自習室として使える多目的スペースやコピーサービスである。カフェ風の内装を採用した理由について、日赤の広報担当者は次のように話す。

「最近10代、20代の献血が特に減少傾向にあるので、そういう層にアピール出来るようにカフェ風にしました。学生さんには毎回献血してもらわなくてもいいので、この場所を自由に使ってもらいたい。同世代の子がいたら、他の子も入りやすいものから」

日赤では、こうした若年層への働き掛けと共にリピーターを増やす目的で、今回紹介したような親しみやすい空間でゆっくり休んでもらえる新しいタイプの献血ルームを増やしてきた。献血ルームでは1時間はかかる献血をお願いすることもある中で、少なくとも献血後は10分、出来れば更にゆっくりと休んでほしいと滞りながらも、別の狙いもある。長く滞在してもらうことでその特徴を

にとどめてもらえれば、利用者がソーシャルネットワークなどを通じて情報発信してくれることも期待出来る。献血ルームの良いPRにもつながる。各献血ルームでコンセプトはそれぞれ異なるが、今はこうした特徴のある献血ルームが時代に合っているようで、今後も増えることが予想されている。

ただ、人の多い場所には献血ルームがあるが、日本全国で見るとやはり移動採血車が圧倒的に多いのが現状だ。

これに対し、ライオンズが献血ルームの誘致に成功したのが、尼崎市内クラブの例だ。

1991年、当時市内にあった8クラブは、それぞれ単独で移動採血車による献血活動を行っていた。そこで一緒に活動に取り組むことで効果を高めようと、合同アクティビティ委員会を組織。何度かにわたった協議の中で、献血ルームを作ろうという話が持ち上がる。この頃、兵庫県内には献血ルームが神戸、姫路、明石に一つずつあるだけで、阪神間には一つもなかった。尼崎市内で候補地に上がったのが阪急塚口駅。5年ほど前に大型商業施設が出来て以来、市内の阪急沿線では、最も人の多い場所となっていた。

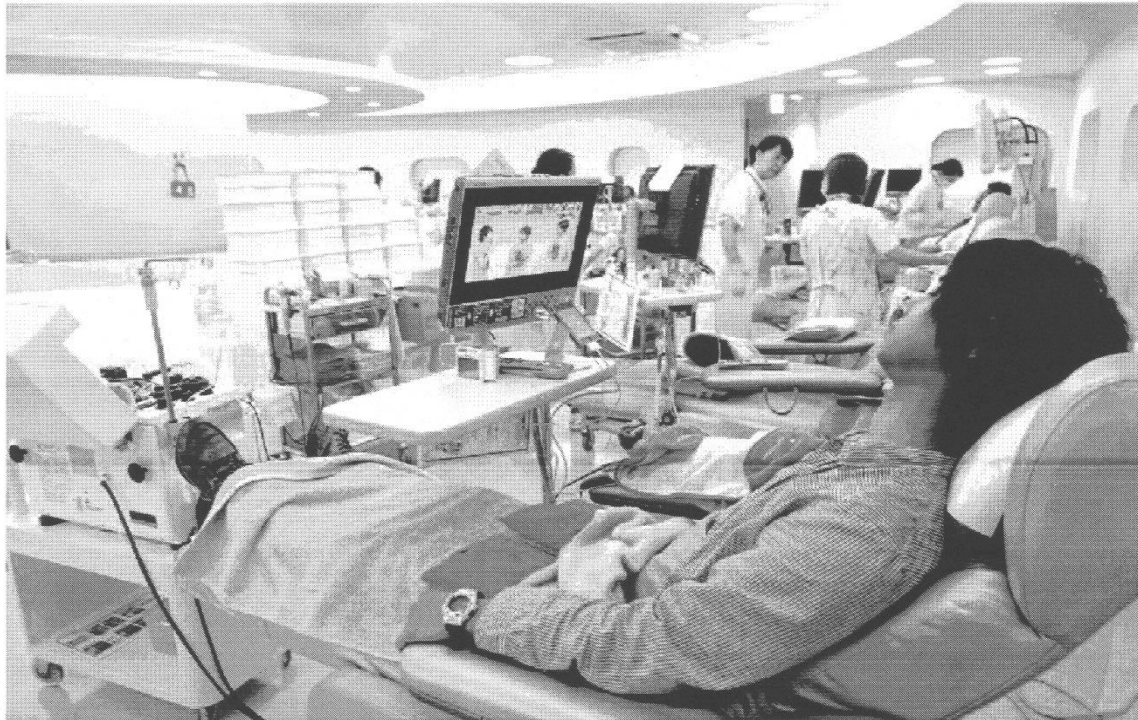
早速、日赤に問い合わせ、物件を探すなど具体的に動き出した結果、件の大型商業施設内に念願の献血ルーム「塚口さんさんタウン」が誕生した。完成後すぐに、8クラブで献血登録者の募集活動を実施。その後は1週間ごとにクラブが交代で呼び掛けを行うスタイルを確立させ、現在も続いている。移動採血車での呼び掛けでは新規が多かったが、献血ルーム・アクティビティを始めてからはリピーターが増えた実感があるという。

前述した西宮のカフェ風献血ルームでも、市内8クラブが一体となつて、献血ルームとタッグを組んで呼び掛けを行っていく予定だ。



尼崎の献血ルーム「塚口さんさんタウン」には、尼崎レオパードが月に一度、応援に駆け付ける

THEME

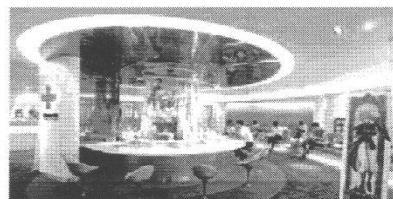


話題の献血ルーム akiba:Fで成分献血

献血体験レポート

文／井原一樹 写真／田中勝明

●1時間程度で終わる成分献血
献血ルームakiba:F。こ
で献血体験を行うことになった。以
前、全血献血をしたことがあるので、
今回は成分献血にする。成分献血と
は、一度抜いた血液から遠心分離機
で血漿や血小板を取り除き、再び体
内に戻す献血の方法。この工程を何
度か行って必要な量の成分のみ採取
するため、全血献血より時間が掛か
るが、体に与える負担は少ない。
受付から問診、血液検査を終え、
休憩所まで待機。水分を補給しておく。
順番がきてベッドに横になると、看
護師さんが右手に針を刺し、献血ス
タート。針の部分タオルで隠し血



秋葉原駅から徒歩1分。オタクの町
「アキバ」を切り取った献血ルーム

JR秋葉原駅の電気街口改札を出て徒歩1分の場所
にある献血ルームakiba:F。「未来」をコンセプト
に作られており、アニメや漫画の展示も行っている。

千代田区外神田1-16-9 朝風二号館ビル5階

TEL. 03-3251-8201

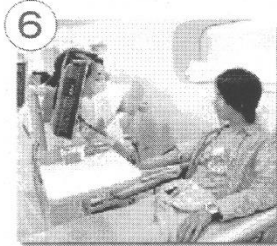
●受付時間【成分献血】10:00～11:30 13:30～17:00

【400・200mL】10:00～12:15 13:30～17:45

●定休日:12月31日、1月1日

LION 2013年9月号 14

akiba:Fでの献血の流れ



献血実施

ベッドになり、献血。テレビや iPod touch が置いてあり、献血している時間も楽しめる。終わったら休憩所で10分以上の休憩をとる。水分補給も忘れずに



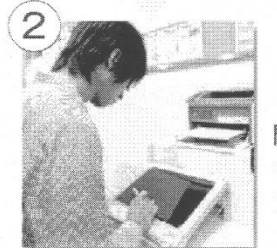
受付をする

まずは受付。この際、どの種類の献血（全血献血か、成分献血か）が希望かを伝える



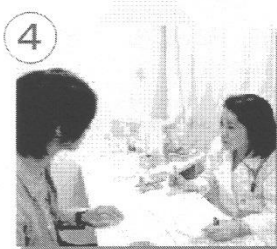
血液検査と採血する腕の決定

血液検査と、採血する腕を決定する。少し血液を抜かれ、その後休憩所で待機。順番になったら鳴るブザーを持たされる



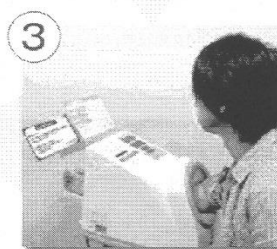
問診票に答える

受付が終わればタッチパネルの問診に答える。輸血に使用出来るかを判断するので正直に答えること



医師による問診

問診票の内容確認と、更に詳しい問診のため医師と面談。akiba:Fではロボットアニメに出てきそうな扉の中が問診場所となっている



血圧を測る

血圧を測り、その結果を受付に持って行く。すると次の問診まで待機となる

液が見えないようにしてくれる配慮がうれしい。

が、そこで問題が。看護師さんから血液の出が悪いと伝えられる。どうやら緊張していたせいで血液の巡りが悪くなってしまうというらしい。そこでカイロを胸の上に載せ、右手にスポンジのようなものを持ち、それを握ったり開いたりして血行を良くしようと試みる。こうして体が温まると、順調に流れ出した。

血液を抜くのに10分程度。戻すのにも同じくらいの時間がかかる。それを3サイクル行っただけで、献血が終わるまでは合計1時間くらいだっただろうか。だが、定期的に看護師さんが様子を見に来てくれるなど終始安心して過ごせたと思う。

終わってからは休憩室でお菓子を食べ、水分補給。何となく脱力感があつたが、緊張していたことによる疲労の影響、そして恐らく気分的なものだったと思う。実際、その後の体調には全く変化がなかった。休憩所はゆったりとした作りで、よく休むことが出来た。

以前400ミリの献血をした時と比べ、体に掛かる負担は少なく感じたし、何よりakiba:Fの快適さが印象的だった。また献血を試みたいと思った一日だった。

日本全国のライオンズクラブが献血活動に取り組んでいる。代表的な4例を取り上げる。
なお、4例目のレオクラブとは、ライオンズクラブ傘下の青年による社会奉仕団体の名称。

THEME



献血アクティビティの現場から1

年間の献血者1万人達成

奈良県・大和郡山ライオンズクラブ

奈良県北部の大和郡山は、日本さくら名所100選に数えられる郡山城と、金魚の産地で知られる。春は石垣に映える桜吹雪、夏には全国から強豪が集う金魚すくい選手権大会が町の風物詩となっている。人口8万8千人のこの町で、大和郡山ライオンズクラブ（富川哲男12・13年度会長／49人）は昨年度、献血者数1万人越えを達成し、335・C地区の献血最優秀賞を受賞した。

昨年度はメンバーの足立豊彦が地区献血・聴覚障害者福祉委員長に就任したことから、クラブが全力を挙げて献血奉仕に取り組むことになった。活動は、月1回の土曜日に多くの市民が訪れる大型商業施設に献血バスを配して協力の呼び掛けを行った他、郡山市内にある奈良県赤十字血液センターへの粗品の提供や、キャンペーン時のPRに協力した。センターへの協力は、これまで特定の日を「ライオンズ・デー」として粗品を渡していたが、昨年度は献血受付日に常に粗品が配れるようにした。また、特に成分献血のPRにも力を入れたところ、それが功を奏したのか、センターでの成分献血の採血量は例年よりも増加したという。

この1年間に大和郡山ライオンズクラブが実施した献血奉仕は14回で、献血者数は1万1083人、献血総量は546万9800ミリリットルに達した。活動に参加した会員は延べ215人。それぞれが家族や友人、知人に広く声を掛けて献血を呼び掛けたことも、大きな成果につながった。

献血者1万人を達成したのは5月25日。この日は記録達成への期待を胸に会員27人が参加し、アビタ大和郡山店前で午前10時に活動を開始した。いつもの通り、全員がユニフォームを身に付け、2、3人で組になって来店者に協力を呼び掛ける。記念すべき1万人目となったのは、ライオンズの勧誘に応じて協力してくれた市内在住の男性買い物客だった。記念セレモニーにはクラブの会員でもある上田清市長が駆け付け、1万人目と前後2人の方に花束と記念品を贈呈した。

1年間活動の先頭に立った富川会長は、献血に対する若者の協力が足りないことを実感したと言う。

「声を掛けた若い人たちのほとんどは献血の経験がありませんでした。しかし粘り強く協力を求めて一度体験してもらったと、リピーターになる確率が高いことにも気付きました」

この手応えを今後の活動につなげていきたいと、富川会長は話している。

LION 2013年9月号 16

大人の社会科見学・献血編

福岡県北東部に位置する^{かんた}荊田町は人口3万6千人。周防灘に面して臨海工業地帯が広がり、国際貿易港の荊田港や北九州空港などの物流インフラが整備されて、自動車、セメント、電力を中心とした工業の一大集積地として発展を遂げた町だ。

荊田ライオンズクラブ（川原実徳12・13年度会長／45人）は6年前から、町内に立地する大手企業や大学での献血奉仕を実施している。以前は町役場で年2〜3回の献血奉仕を行うのが恒例だった。そんな中、07年度クラブ会長を務めた^あ平石和久は赤十字血液センターの担当者から若者の献血の減少が著しいことを聞き、「献血奉仕、年間千名目標」を掲げた。これをきっかけに町内の企業へ協力を呼び掛け、以来毎年続けている。

荊田ライオンズクラブが昨年度に実施した献血奉仕は、11回が企業、3回が荊田町役場、2回が西日本工業大学、1回は荊田工業高校の卒業記念献血で、計17回。1回の受付で多い時には100人を超える人が協力し、この1年間の献血者数は1087人、献血総量は43万4800ミリットルに上った。献血の他にも、受付でPRしている骨髓バンク登録に16人の協力があつた。

企業内献血を実施する日立金属^あ、日産自動車、九州電力^あ、三菱マテリ

アル、宇部興産^あの5社は、いずれも会員の勤務先だ。各企業にはまず会員から話をした上で、クラブ役員と赤十字血液センターの担当者が訪問して協力を依頼する。実施当日は必ずクラブから数人が参加し、心を込めてお礼の言葉を掛けている。

5月23日の献血奉仕は大学と企業の2カ所で行われた。西日本工業大学では10時から16時まで、^あ木原康博が工場長を務める宇部興産^あでは13時半から16時まで実施。どちらの場合も、受付や問診は施設内の1室に設けた会場で行い、その後、献血バスの中で採血となる。

西日本工業大学での活動には学友会の学生たちが積極的に参加し、休憩時間にプラカードを持って呼び掛けたり、友人を誘って連れてきたりと協力してくれた。一方、企業ではあらかじめ部署ごとに献血の時間を割り振ったり、関係企業にも協力を頼んだり、更には役員が受付係になって献血者に言葉を掛けたりと、こちらも非常に協力的に取り組んでくれている。献血協力者への粗品には、大学では若者向けにパンや即席麺、社会人向けにはメジャーやLEDライトなど数種類を用意するなど、気を配っている。

町の特徴を生かした荊田ライオンズクラブの独自の取り組みは、他クラブにも参考になるはずだ。

企業や大学に輪を広げて

福岡県・荊田ライオンズクラブ



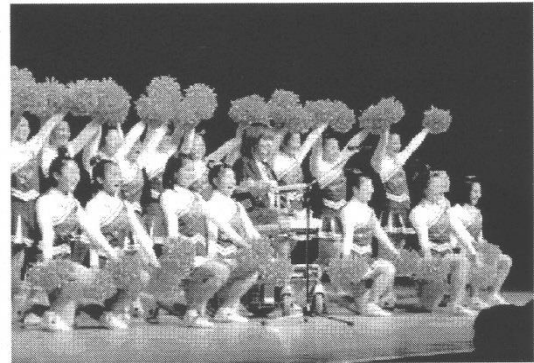
献血アクティビティの現場から2



334-A地区

愛知県・津島ライオンズクラブ

「特別じゃない 私はふつう」
佐野有美さん大いに語り歌う!



2012年12月9日、津島ライオンズクラブ(69人)は青少年健全育成事業の一環で「佐野有美さん講演とミニライブ」を主催した。1100人のお客さんが詰めかけ、津島市文化会館ホール前には長蛇の列が出来た。

愛知県出身の佐野有美さんは先天性四肢欠損症で、あるのは短い左足と3本の指のみ。しかし彼女は豊川高校でチアリーダーとして注目されたのをはじめ、あらゆる分野で活躍した。そんな彼女を取り上げたテレビ番組を見ていた石井利一

会長と私は、逆境に負けず果敢に生きる有美さんと、献身的なご両親の姿、そして多くの友達との友情にたく感動した。そしてこの感動を多くの人々と分かち合いたいと講演をお願いした。オープニングは友情出演の清林館高校チアリーダーデイングチームが華麗な演技を披露。その後、特別な電動椅子で登場した明るく可愛らしい笑顔の有美さんには、会場から割れんばかりの拍手が送られた。生と死と闘った22年間を、有美さんは明るい笑顔で語られ、会場からは笑いと、時折すすり泣く声が聞こえた。次は日本レコード大賞企画賞に輝いた有美さんのミニライブ。その澄みきった歌声が会場に響き渡った。清林館高校チアリーダーが有美さんを囲んでのエンディングに観客は総立ちだった。

「ありがと、良かったよ」「勇気をもらいました」と、会場を後にする人々の声に、今期最大の充実感か、見送りに立つ石井会長の目は心なしか潤んでいた。

(幹事 長尾昌和)

宇都宮ライオンズクラブ(菅谷文利会長/27人)は今年度、52年目の活動に入った。そこで昨年末の活動を歴史を交えて原稿にすることとした。

2012年10月6日には栃木県立衛生福祉大学において「献血支援」を実施した。当クラブの献血支援活動は1981年に行った市内ライオンズクラブ合同献血会に始まる。その後、献血事業をスタートさせ、30年が経過した。86年には市内のオリオン通りに常設の献血ルームが開設され、当クラブはその前で

献血推進事業を行った。これはこの献血ルームが2004年、宇都宮大通りに「うつのみや大通り献血ルーム」として移設されてからも、継続している。また、02年からは栃木県農業大学校、栃木県立衛生福祉大学校においても献血推進事業を開始した。このように、献血奉仕事業はクラブ内で継続アクティビティとして定着している。

10月7日には宇都宮市「荒山神社前」で「赤い羽根街頭募金」を実施した。12月9日に実施した歳末助け合い街頭募金と共に、



333-B地区

栃木県・宇都宮ライオンズクラブ

我がクラブの奉仕活動

48年間継続している。県内のライオンズクラブでは当クラブが唯一実施しているもので、栃木県知事から表彰状も頂いた。10月27日には「第10回うつのみやふれあいスポーツ大会」を後援した。この大会は障害者の方を中心としたスポーツ大会で、今年は956人が参加した。当クラブでは参加者全員にお弁当とお茶を配布提供している。前身の知的障害者スポーツ大会から数えて今回で22回目の継続奉仕である。

(PR情報委員長 坂本竹男)

3月10日、上総ライオンズクラブ

（月崎和雄会長／45人）の環境保全委員長である石橋英男を始めとした4人は千葉県旭市の旭ライオンズクラブを訪れ、加瀬朝彦会長ら3人に迎えてもらった。旭市は東日本大震災の津波で大きな被害を受けた地域であるため、当クラブからは黒松の苗木50本と支援金5万円を寄贈した。石橋は「明日の3月11日で、あの震災から満2年が経ちます。旭市は津波による被害で海岸の黒松の多くが枯死しました。今日は黒松の苗木を持参しまし

333-C地区

千葉県・上総ライオンズクラブ

東日本大震災被害の旭市に 黒松の苗木50本と支援金寄贈



たので、適した場所に植えてください」とあいさつ。加瀬会長からは「遠方からありがとうございます。頂いた黒松は近く、植樹計画の中で植えさせて頂きます。支援金も頂き、感謝しております」とお礼の言葉があった。その後、昼食をとりながら双方のクラブの運営などについて話し合い、親睦を深めた。乗用車から見た海岸では、沿線の黒松が津波の影響でかなり枯死しているのが確認出来た。改めて当時の恐ろしさを感じられ、寄贈した苗木が早く活着し

て大きく育ち、元の防風林のようになることを願った。寄贈した苗木は3年前の3月、私が松ぼっくりから種子を取り出してまき、育成したもの。元々は植樹をし、地球温暖化防止に役立てようと生育させていたものだったが、震災の復興に使って頂こうと考え、寄贈することにした。当クラブは東日本大震災の被災地へ数回にわたり支援金を贈っており、一日も早い復興を願っている。（PR情報会報編集委員長 斎藤敏夫）

尼崎レオパード（23人）は2012年の11月から、毎月第3土曜日に献血推進活動を行っている。3月16日にも今期5回目となる献血推進活動を行い、7人が参加した。この日は「けんけつちゃん」の着ぐるみも着用し、道行く人に献血を呼び掛けた。また、今までティッシュや風船を配っていたが、新しい試みとしてスーパボールも配ることにした。着ぐるみの着用や風船、スーパボール配りは子どもの興味を引き、その親御さんに献血を呼び掛けるため行っている。

また、今回は看板も作った。「けんけつちゃん」のイラストに「献血にご協力お願いしますっち」と「けんけつちゃん」のメッセージを添えるなど親しみやすいものを作るよう心掛けた。この看板によって多くの人に、より直接的に私たちの訴えを伝えることが出来た。また、パソコンで作成した看板ではなく、手描きのものを使用したことにより、注目されやすく、心の込められた仕上がりになっていると、献血ルームの方にも褒めて頂いた。私たち自身にとって



335-A地区

兵庫県・尼崎レオパード

手書き看板で献血推進活動

も、用意されたものを使うのではなく、自ら作成することで、より献血への意識が高まったと感じている。第4回目の献血推進活動では、親御さんが献血をされている間、子どもを預かるキッズルームで折り紙を教える折り紙教室を実施し、好評だった。しかし、第5回では実施出来なかったため、今後はまた導入していきたいと考えている。このようにこれからも、私たちに出来る献血推進活動を積極的に行っていくつもりだ。（会長 堤希帆）